

思い出の絵地図 2

暮らしのエピソード

戦前の下馬は陸軍の兵舎や練兵場が設けられた軍隊のまち。
戦後、兵舎は戦争で焼け出されたひとや外地からの引揚者など、住まいに困難を抱えた人々の生活の場として使われました。「世田谷郷」とも呼ばれたこの地域には、団地への建て替えが進む昭和30年代まで多くのひとが暮らしました。そんな兵舎住宅と、そのすき間に増設された平屋での暮らしをご紹介します。

進行・編集・文 阿部健一
地図デザイン 齋藤優衣
イラスト 譚林宣（武蔵野美術大学大学院造形研究科 博士後期課程）
写真提供 内田和子さん、篠原勇さん【平屋の風景】
発行 世田谷パブリックシアター
発行日 2023年7月8日

住みよいうにつくりかえてた

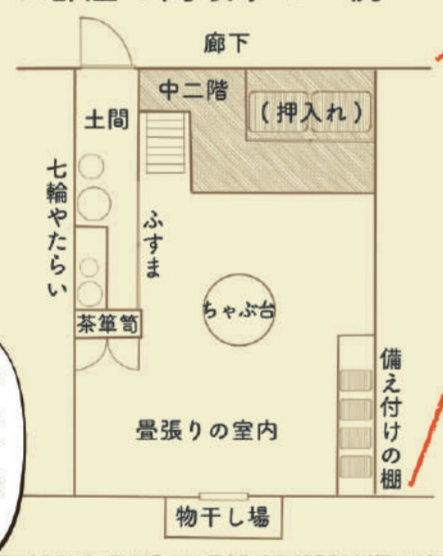
元々は兵隊が寝泊まりするための質素な部屋。家族で暮らすようにできていなかったため、住みやすいよう各家庭で様々な工夫をしていました。ふすまや障子で部屋を区切ったり、物干し場や中二階を増設したり、一つとして同じ部屋はないほど。職人さんも多かったためそうした改修は自分たちで行うことが多かったそうです。廊下から丸見えにならないよう土間に沿って板を立てたり、茶卓を置く家もありましたが、毎朝廊下で煮炊きをしたり、水場で顔を合わせていると、「どんな生活をしているかは見えちゃう」環境でした。床は畳張りで14~15畳くらい。多い家では8人ほどが暮らしたそうです。



室内の様子
（昭和29~30年）

換気ができないから朝飯時は煙のなかを歩いているよう。すすだらけのお釜を磨いたりしたね。

お部屋の間取りの一例



集まるのはいつも昇降口

寮に入っすぐのところに大きな三つの昇降口。半屋外のようなこの場所は、松寮の子どもたちにとって一番身近なあそび場でした。流行っていたのはメンコやベーゴマ、馬とびやゴム段など。どの家も兄弟姉妹が多く、小さい子から大きな子まで一緒にいるのが普通の光景です。特に男兄弟がいる女の子はベーゴマのような「男のあそび」もかなりやったそう。夜21時や22時まであそんでいても「親に怒られることはなかった」。それは大人数でいるから心配ないというだけでなく、決して広くない部屋にずっと子どもにいられても困るという事情もあったようです。あそぶものも食べるものも乏しい時代、行けばだれか友だちのいる昇降口は集まるだけで楽しい場所でした。

ただし昇降口もトイレも水場も、日頃つかったのはそれぞれ自分の家から近い方。同じ寮に住んでいても、家から離れた方に行くことはありませんでした。

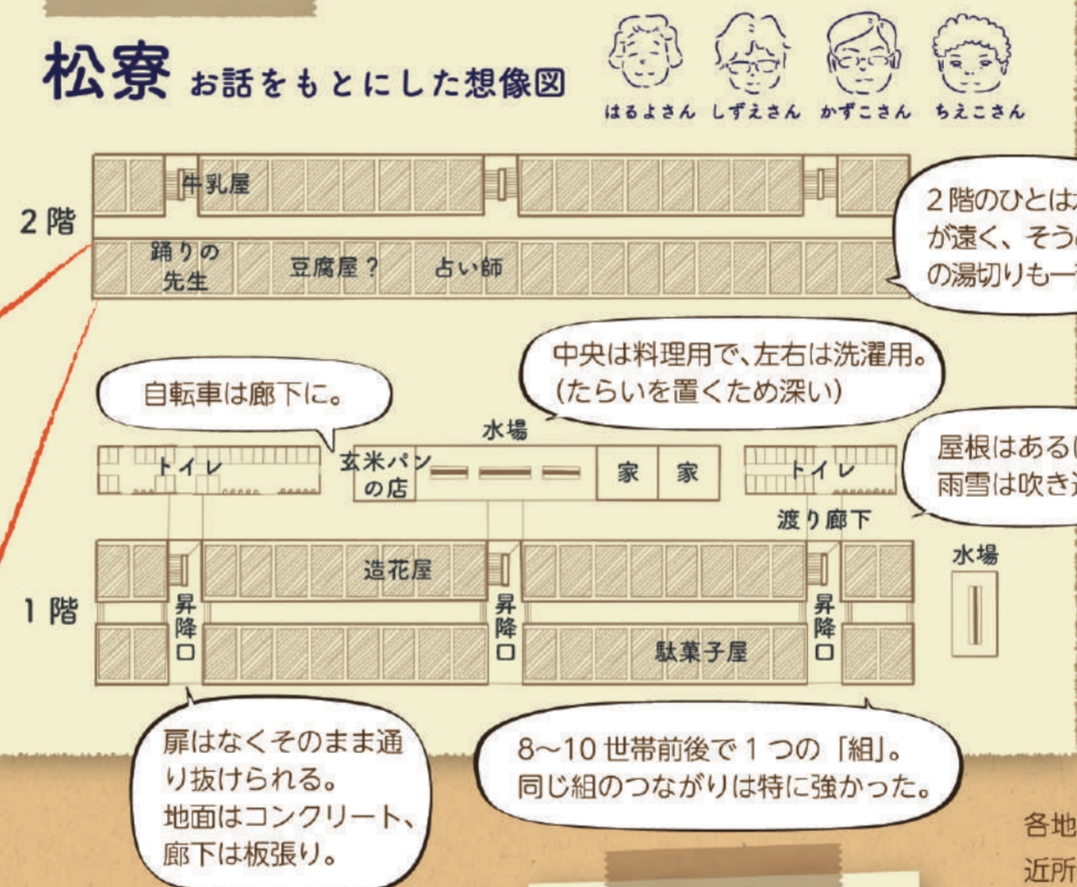


兄にくっついてたから、家のあいだを走り抜けて鬼ごっこしたり、桜並木にターザンロープを張ってもらったり。おままごとしてる女の子はいなかった気がするなあ。

同じ学校に通ってる他の寮や兵舎の外に住んでる友だちもいたよ。でもやっぱり松寮の友だちはちょっと違ったね。

昭和37年時点の家賃は155円。
支払いは組合事務所。
（当時かけそば一杯約40円程度）

松寮 お話をもとにした想像図



自転車は廊下に。

中央は料理用で、左右は洗濯用。
（たらいを置くため深い）

2階のひとは水場が速く、そうめんの湯切りも一苦労。

屋根はあるけど雨雪は吹き込む。

扉はなくそのまま通り抜ける。
地面はコンクリート、廊下は板張り。

8~10世帯前後で1つの「組」。
同じ組のつながりは特に強かった。

なにより怖かったのはおトイレ

汲み取り式のお手洗いは、兵隊がつかっていた頃のまま。当然男女に分かれておらず、女の子がつかうには様々な不安を感じる場所でした。裸電球が吊られているだけで全体的に薄暗く、扉の下の方にはすき間が空いていて、冬は冷たい風が吹き込みます。その怖さは「何年住んでいても怖かった、トイレのほかには不満はなかった」というほど。だからこそ団地に移り住んだとき、備え付けの水洗トイレと水道は、ひときわうれいものに感じられました。



いつも一番手前のところって決めてたの。

お友だちと一緒にじゃないと本当行けなかった。

「松寮は大きな家族」

各地からひとびとが集まった世田谷郷。それぞれの寮では濃密で複層的なご近所づきあいが営まれていました。造花屋さんの内職をみんなでやったり、父親が正月に近所の子たちを部屋に集めてカルタ大会を開催したり、醤油を貸し借りしたり、好きな布を渋谷のマルナンで買ってきたら裁縫の得意な女性がスカートを縫ってくれたり。寮のなかを仕事場にしているひともしなくなかったそうです。2階には踊りと三味線の先生をしているおばあさんがいて、友だちと習った女の子たちもいました。

お祭りはそんな寮の団結心が発揮される絶好の機会。手づくりの神輿を競い合う様子は「とにかく盛大」で子どもにとっても一番の楽しみ。「大きな家族だった」と話すひともあります。

そんな結束と裏腹に、外の人間から兵舎は特別な目で見られることもありました。元は軍の部隊を意味し、その後この地域を指してレットルのように使われた「連隊」ということばは、団地への引越後も残り、嫌だなど感じることもあったそうです。



松寮前、お祭りの風景（昭和27年頃）

わちゃわちゃだったけど、ひとへの思いやりの心が身についたのかもしれないなあ。

子どもだったから、松寮の外のことはよくわかっていなかったね。

けっこうおしゃべりしてたんだよ。

平屋（ニコイチとも呼ばれた戸建住宅）

お風呂屋さんで知り合い増やした

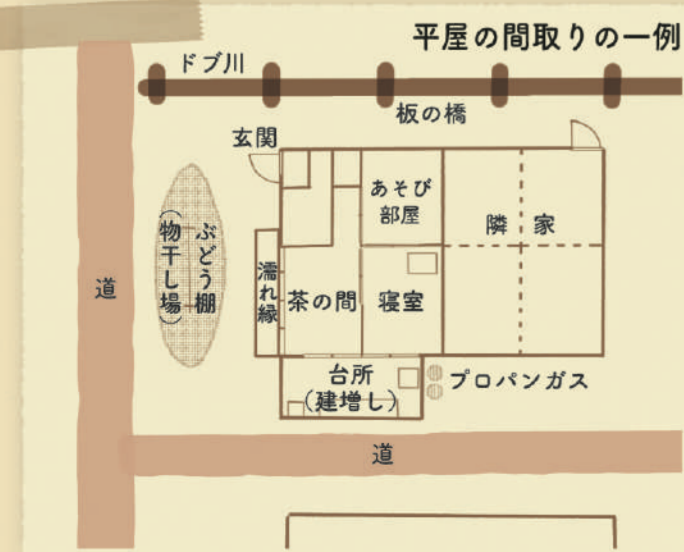
兵舎だけでは住まいが不足し、次々と空き地に増設されていったのが平屋の都営住宅。2軒が連なっていたため「ニコイチ」とも呼ばれたこの住宅でも、続々と帰国する引揚者やその親類・知人が生活を営みました。平屋にもやはり班のような仕組みがあり、ときには近隣で集まることもありました。けれど地域に顔見知り



平屋の風景（左図とは別の場所）

を増やす道のりはひとそれぞれ。結婚し、昭和34年に越してきた方が知り合いを増やした場所はお風呂屋さん。子ども同士が空き地であそぶなかで仲良くなり、そのつながりが銭湯での親のコミュニケーションのきっかけになったそうです。大人になってから入居したひとにとっては、残された戦中の施設が生活の場として使われていることへの驚きが、子ども以上に強くあったようです。

庭も入れるとけっこう広い。それぞれ手を入れてたから、家ごとに全然違うはず。



「懐かしいよね」「自分のルーツがあるから」「この頃があったから今があるんだよ」
・・・下馬の思い出の風景を掘り起こす旅は、ゆっくりじっくりと続きます。
（左のQRコードを読み取ると現在の地図と重ねて見られます）



▶問い合わせ 世田谷パブリックシアター 学芸 TEL: 03-5432-1526 FAX: 03-5432-1559